

# Man. Astr. 5.604 と語源的あや

竹下 哲文\*

2018年10月13日

第17回フィロロギカ年次研究集会（成城大学）

## 1 はじめに

黄道12宮とともに昇る星座（*paranateállonta*）のもたらす影響について書かれたマーニーリウス『アストロノミカ』第5巻には、比較的長いアンドロメダに関するエピソードが挿入されている。その中にはペルセウスと海の怪物ケートゥス（今日ではくじら座とされる）とが繰り広げる戦いの様子が描かれている。その結びに近い部分の一節は次のようになっている。

*efflat et in caelum pelagus mergitque volentem  
sanguineis undis pontumque exstillat in astra* (Man. 5.603-604)  
（怪物は）大海を天へと吐き出して、血の滲む波を  
宙を翔ける英雄に浴びせかけ、海水を星にまで繁吹き上げさせる<sup>1</sup>。

*exstillat M: extollit GL*

注記した通り写本の読みは分かれているが、大方のエディションではM写本の*exstillat*が採用されている。しかし詳しく考えてみるとその意味するところにはいくつかの問題が出てくる。そのため比較的近年にGL写本の読みの方を取るべきではないかという提案が行われたが（JONES 1984の案でLiuzziもそれに倣っている）、それ以後の研究でこの箇所の問題は十分検討されているとは言い難い。

本発表は、これまでの多くのエディションと同様に、読みとしては難しい（*lectio difficilior*）M写本の*exstillat*を採用するべきという立場で、しかし未だ十分に考慮されていないマーニーリウスの用いた文体や表現上の特徴という観点から支持根拠を付け加えるものである。

\* 京都大学（日本学術振興会特別研究員DC2）。

<sup>1</sup> なお Goold の英語訳は以下のとおり。'it spouts forth sea towards heaven, drenches its winged assailant with a blood-stained deluge, and sends in spray the ocean to the stars.'

## 2 これまでの議論

まずこれまでの主要な校訂者・註釈者の見解を確認しておこう。

### 2.1 Scaliger, Bentley

Scaliger, Bentley ともに本文には *extollit* を採用し、註釈で特別な議論をおこなってはいない<sup>2</sup>。

### 2.2 Jacob, Bechert, Breiter, van Wageningen

*exstillat* を採用する考えは Jacob にさかのぼる。もっとも Jacob 自身はそれ以上の言及をしていない。

Bechert は本文には *extollit* を採用し、*apparatus* で Jacob が *exstillat* の読みを支持した旨記している。Breiter は本文を *exstillat* として、表現の誇張度合いを問題にする註をつけている<sup>3</sup>。

また van Wageningen も *exstillat* を採用し、註釈ではこの語が通例自動詞として用いられることに触れている<sup>4</sup>。

### 2.3 Housman

そして Housman は、Jacob が採用した *exstillat* の方が *extollit* よりもすぐれるとし、単純動詞 *stillo* におけるような他動詞用法はこの複合動詞に例を見ることができないと認めつつも *exstillat* を受け入れている<sup>5</sup>。そしてまたこれがウエルギリウスからの模倣であるともしている。

**604 *exstillat* M, *extollit* GL.** *illud multo significantius est recteque ab Iacobo receptum, etsi usus transitivi, de quo in simplici uerbo constat, exemplum in hoc quidem composito non uidetur extare; nam de Colum. XII 50 2 parum liquet. imitatur Verg. Aen. III 567 *spumam elisam et rorantia uidimus astra* (HOUSMAN 1930: 76-77)*

『アエネーイス』から引かれているのは「三度砕け散る泡と露の滴る星々を我らは見た」という箇所である。

Housman の言う通りにこの箇所が『アエネーイス』の模倣であると認めるとしても、マーニールウスの詩句・表現そのものの十分な説明が与えられているとは言い難い。

<sup>2</sup> SCALIGER 1579: 132; BENTLEY 1739: 295. FAYUS, PINGRÉ も同様に *extollit* のまま註釈はない。

<sup>3</sup> '*extollit pontum* wäre übertrieben; *exstillat* m ist angemessen' BREITER 1908: 172.

<sup>4</sup> *stillatim* *eiaculatur*, Col. XII 48.2: '*atque omnem amurcam extillare*' sed plerumque hoc verbum intransitivum est. (VAN WAGENINGEN 1921: 307). ただしコルメツラからの用例は完全に引用すると '*... superposito copioso sale, ita olivam contegat, xl dies pati (sc. convenit) consudescere atque omnem amurcam extillare*' であり、*amurcam* を *extillare* の目的語とするか主語とするか判然としない点がある。なお TLL はこの箇所を自動詞に分類している。

<sup>5</sup> そしてこれは Teubner 版の校訂者 Goold にも引き継がれている。

## 2.4 Jones, Liuzzi

この箇所について比較的最近に問題を提起した Jones の議論<sup>6</sup>を確認しよう。

結論から言うと Jones は *extollit* という別系統の写本の読みを採るほうがよいと提案している。*exstillo* という動詞がこの箇所を除いて雫が重力によって下方へと垂れ落ちる運動について用いられる自動詞であることを挙げ、*exstillo* 自体が用例の少ないことを踏まえその他動詞用法に眼を瞑るとしても、この動詞の通常の意味合いとの類似性が乏しく疑いがもたれることをその根拠とする。そしてエンニウスやウァレリウス・フラックス<sup>7</sup>からの並行箇所を元に *extollit* という読みを支持する結論を下している。

この Jones の提案を支持し本文に採用したのが Liuzzi による註釈つきイタリア語対訳版である<sup>8</sup>。その註では Jones の議論を概ねそのとおりに引き、Housman によって引用されたウェルギリウス『アエネーイス』からの詩行を（これも Jones と同様に）全く意味・文脈の異なるものとして支えにはならないと斥けている。

## 2.5 Hübner, Feraboli et al.

上記 Jones の議論の後に出た『アストロノミカ』のテキスト（および翻訳・註釈）では、先の Liuzzi を除くと、どれもこれまでどおり *exstillat* を採用している。Hübner も<sup>9</sup>、Feraboli et al. も<sup>10</sup>、Jones の議論に言及はしているため、その存在自体は認識しつつも、本文に反映させるほどのものとは考えていないということのようである。

全体としてみると、Jones の行った提案は Liuzzi 以外には支持を見出せていないものの、先立つ Jacob から Housman までの註釈は考え方の筋道が追いやすいとも言えず、疑問が抱かれるのも無理はない。また Jones 以後の註釈テキストも、過去の議論を把握してはいるが、読みの選択を巡る問題を深く検討しているわけではない。

---

<sup>6</sup> JONES 1984.

<sup>7</sup> *Enn. Ann.* 430-432W (venti) fluctus extollere certant; Val. Fl. 2.508 Orion bipedum flatu mare tollit equorum.

<sup>8</sup> vomita anche in aria l'acqua ed inonda l'eroe volante | di un fiume di sangue e quasi solleva il mare fino alle stelle. (LIUZZI 1997: 73)

<sup>9</sup> Hübner は、ドイツ語訳では 'Sie sprüht Meerwasser zum Himmel empor und taucht den Fliegenden (Perseus) | in blutrote Wellen und spritzt das Meerwasser hoch zu den Sternen' とした上で註釈では 'Die Bewegung nach oben ist widernatürlich, vgl. Jones(1984) 139 "Exstillo ... is always used for liquids moving downwards by force of gravity in drips." Die epischen Parallelen bei Housman (Verg. Aen. 3,567) und Jones (Val. Fl. 2,451ff.) lassen auf ein ennianisches Vorbild schließen. Im übrigen treffen wieder die beiden Elemente Luft und Wasser aufeinander, s.o. zu 5,599 laxum ... per aethera ludit' と Housman, Jones 双方の引いた例を持ち出している。

<sup>10</sup> イタリア語訳は 'sbuffa anche zanpilli verso il cielo e sommerge il volante | avversario con getti sanguigni e spruzza fino agli astri l'oceano' とした上で註釈の中では 'in astra: per l'iperbole, cfr. in nota a IV 261-2. Il verbo *exstillo* viene opposto al più ovvio e naturale *destillo*, che esprime il cadere delle gocce dall'alto, e risulterebbe una innovazione semantica assoluta di Manilio (discussione in Jones 1984)' と述べている。

### 3 写本伝承の概要

マーネーリウス『アストロノミカ』を伝える写本中主要なものは以下の3冊である。

- **M** = codex Matritensis 3678
- **G** = codex Gemblacensis (Bruxellensis 10012)
- **L** = codex Lipsiensis 1465

このうち G と L は共通の祖本  $\alpha$  から派生したと考えられ、問題の箇所での読みの割れ方は単純に多数決では解決できない類のものである<sup>11</sup>。したがって読みの意味内容を考慮しつつ判断することが求められる。

### 4 exstillo の用法上の問題

exstillat という読みの抱える問題のひとつは、すでに指摘されているのを確認したとおり、他に例のない他動詞用法にある<sup>12</sup>。しかしこの点については、

- そもそもこの動詞の用例自体が極めて少ない
- e(x)-複合語の自動詞・他動詞区分に関する例外がマーネーリウス自身に見られる

の2点を考慮しなくてはならない。前者については Jones も認めていたところであり、後者の点に関しては、

ut possim rerum tantas emergere moles (1.116)

これほどの題材の困難を乗り越えることができるように……

という行が取り上げられる。序の結びの部分で詩人が自らの企ての成功を願う箇所である。ここで問題となるのは *emergere* という動詞が *moles* という対格の目的語をとっていることである。単純動詞の *mergo* が他動詞であるのに対し *emergeo* は通例自動詞であるため、例外的なケースと考えられるからである。このため Bentley は *evincere* への修正を提案したが<sup>13</sup>、今日一般には *emergere* を残して読むことで一致している。もっともその場合にも、*eluctor* などの類推により「乗り越える、克服する」という意味で対格をとっていると考えるか、*se emergere* のような再帰的用法から考えて「あらわにする、明らかにする」と考えるかのふたつの解釈がありうる<sup>14</sup>。いずれにせよ *emergeo* の標準的な用法からは外れた例となる。

<sup>11</sup> Jones は 'this is far from giving certainty to the former(=exstillat)' と言っているがこれは少し短絡的である。

<sup>12</sup> TLL はこの語の他動詞用法 (*transitive; fere i. q. guttatim spargere, in altum eiaculari*) として挙げるもののマーネーリウスのこの箇所のみである。

<sup>13</sup> BENTLEY 1739: 9.

<sup>14</sup> 前者は HOUSMAN 1903: 10; VAN WAGENINGEN 1921: 38, 後者は FELS 1990: 19; LIUZZI 1995: 67 に見られる。筆者としては詩人が両方の意味を帯びさせるために積極的に *emergere* という語を選んだのではないかと考える (竹下 2016: 42-44)。

このため *exstillat* の他動詞用法の例外性は、そのみをもってこの読みに対する強い疑いの根拠とすることはできない。

## 5 表現の内容上の問題

他方で *exstillat* を採る積極的な理由はこれまであまり論じられていなかった。Housman の註釈がその性格を持つてはいるが、説明の不十分さは否めない。

しかしマーニールウスがしばしば用いる（擬似）語源的あやないしは一種の同族呼応的表現を踏まえると異なる視点を得ることができる。つまり *exstillo* を構成する「零 *stilla*」と「星 *stella*」との関連付けを考慮に入れることで、*exstillat* の読みを採用する積極的な理由が生まれるのである。

### 5.1 *stilla-stella* イメージ

*stilla* と *stella* との間に関連を見出す考え方が存在したことはクインティリアーヌス『弁論家の教育』から知ることができる。語源研究に過度に熱中する人々に対する懐疑を示す文脈で言及されている<sup>15</sup>。

*sic pervenimus eo usque ut 'stella' luminis stilla credatur, cuius etymologiae auctorem clarum sane in litteris nominari in ea parte qua a me reprehenditur inhumanum est. (Quint. Inst. 1.6.35)*

### 5.2 （擬似）語源を意識した表現

マーニールウス『アストロノミカ』には、単なる同音・同語の反復や掛け言葉的な表現のみならず、語源（今日の言語学的にも妥当するもの・いわゆる「民間語源」であるものを含めて）を利用した表現が見られる。それらのうちには、前後の文脈だけでは音声・字母上の類似語句が直接出ていないものの、語源的な連想を踏まえて理解されうるケースがあり、そうした関連付けが作品の主題となる語句と関わりを持つ場合も見られる。

#### 5.2.1 アウグストゥスへの暗示 (1.7)

*qui regis augustis parentem legibus orbem, (Man. 1.7)*

崇高な法に従う世界を統べるあなたこそは……

全巻の冒頭での、詩を捧げる相手への呼びかけの一部であり、明示されてはいないがアウグストゥスのことである。*augustis legibus* がそのことを示唆しており、このケースは語源的な関連ではなく同音をもちいた暗示の一種と考えられる。

<sup>15</sup> *stella* の語源についてはこれ以外の他の説も確認されている。Cf. MALTBY 1991: s.v. *stella*.

### 5.2.2 天に関する表現 (1.680, 703)

写本の読みを不可として修正が試みられてはいるが、1.680 には天について擬似語源的な工夫が認められる。

*insignemque facit caelato lumine mundum.*(Man. 1.680)

(黄道帯は)彫刻の施された光によって天を輝かしいものになっている。

*caelato lumine* O *prob. van Wageningen, Liuzzi: lato caelamine Garrod, Goold: caelato culmine Housman, Flores*

修正案が試みられているが、それらを採用する場合でも *caelato* ないしは *caelamine* が現れる。そしてそれは *mundus* (この場合はその実際の意味である「天 *caelum*」)に関連づいている。大プリーニウスは「天 *caelum*」と「彫刻する *caelare*」を関連付けるこの説明をウァッローに帰し、「宇宙 *mundus*」の壮麗さ、またそれが完成されたものであることを言う文脈の中で言及している<sup>16</sup>。

*namque in caeruleo candens nitet orbita mundo*

*ceu missura diem subito caelumque recludens,*(1.703-704)

実際この環は青黒い空に白く輝き

まるで天を開いて突然に光を放とうとするかのよう……

今度は銀河の描写である。今度は *caeruleo mundo* と並べられており、*caeruleus* と *caelum* の関連付けを踏まえていると思われる<sup>17</sup>。

### 5.2.3 *ratio-ratus* (2.134)

*quod Fortuna ratum faciat, quis dicere falsum*

*audeat et tantae suffragia vincere sortis ?* (2.134-135)

運 (Fortuna) が定めるところを、誰が敢えて誤りと称し

これほどの大役が投じた票に勝ることができようか。

ここで「運の定めるところ *quod Fortuna ratum faciat*」は運命の掟であり、そこには世界を統べる理性としての *ratio*<sup>18</sup>との関連付けを見ることができる<sup>19</sup>。

<sup>16</sup> *equidem et consensu gentium moveor; namque et Graeci nomine ornamenti appellavere eum et nos a perfecta absolutaque elegantia mundum. caelum quidem haut dubie caelati argumento diximus, ut interpretatur M. Varro. adiuvat rerum ordo discripto circulo qui signifer vocatur in duodecim animalium effigies et per illas solis cursus congruens tot saeculis ratio. Plin. NH 2.3.8. Isid. Etym. 13.4.1 も参照。またギリシア語の *κόσμος* とラテン語の *mundus* の意味、とりわけマーニウスにおける後者の働きについては Volk 2009: 18-23 を参照。*

<sup>17</sup> 実際 *caerulus/caeruleus* は *\*caelulus* から異化してできたと考えられる。DE VAAN 2008: s.v. *caelum*。

<sup>18</sup> Cf. LüHR 1969: 177. Lühr はまたこの箇所での *Fortuna* を *fatum* と同じ意味に理解している。LüHR 1969: 182。

<sup>19</sup> 更に FERABOLI et al. 1996: 304 はここにウァッローの証言 (*quod enim fit rite, id ratum ac rectum est* (Varro, *Lat.* 7.88)) を通して *rite* との繋がりをも見ようとしている。

#### 5.2.4 Mavors と mors (2.443)

pugnax Mavorti Scorpis haeret; (Man.2.443)

好戦的な天蠍宮はマールスの傍につく。

宮と神々の関係を綴った箇所。戦の神マールスが Mavors という古形で現れているのは<sup>20</sup>、ルクレティウス『事物の本性について』を参照して Mars と mors の関連付けを踏まえている可能性が認めうる<sup>21</sup>。

#### 5.2.5 その他の例

その他にも語源的な関連付けを示唆する箇所が見られる。興味深いのはラテン語内だけではなくギリシア語をも視野に入れている点である。4.81 では frons と φροντίς が結び付けられている他<sup>22</sup>、マウレーターニアの住人の肌が黒いことを μαῦρος, ἀμαυρός の形容詞を念頭に語っていたり<sup>23</sup>、ケンタウルス座の影響を受けた者が驢馬や馬を駆ることを Κένταυρος, κεντεῖν の関係を意識して綴ったりしている<sup>24</sup>。

## 6 結論

以上を踏まえて再びマーニリーウスの詩行に戻る。前置詞 in を単なる物理的方向の意味ではなく、状態変化の結果<sup>25</sup>の意味に理解すると、

efflat et in caelum pelagus mergitque volentem  
sanguineis undis pontumque exstillat in astra (Man. 5.603-604)

(怪物は) 大海を天へと吐き出して、血の滲む波を

宙を翔ける英雄に浴びせかけ、海水を星のように滴り落ちさせる。

という解釈が可能だろう。Jones が難点とした exstillo の通常の意味からの逸脱や、仮に extollit を採用した場合に生じる、efflat in caelum pelagus とほぼ同義の表現を繰り返すことになるという問題も解消され、更に上に述べたような「星」と「雫」の語源的関連が活かされた詩句と見ることができ<sup>26</sup>。

<sup>20</sup> 4.500 にも同じ Mavors の形は現れる。

<sup>21</sup> Cf. Lucr. DRN 1.32. 'He (= Mars) is also a symbol of disintegration, and indeed of death: it may well be that Lucretius uses the archaic form Mavors here, and only here, in order to underline the connexion between Mars and Mors.' WORMELL 1960: 61.

<sup>22</sup> alterius frons est scribendis legibus apta. (Man. 4.81). この指摘については FERABOLI et al. 2001: 318 を参照。

<sup>23</sup> et Mauretania nomen | oris habet titulumque suo fert ipsa colore. (Man. 4.729-730).

<sup>24</sup> aut stimulis agitabit onus (5.350). Housmanによるとこの onus は ὄνος でギリシア語と考えられる。

<sup>25</sup> OLD s.v. in 19 a; Kühner-Stegmann §107 d.

<sup>26</sup> こうした語源的意匠の背後にはストア派の語源論が影響している可能性は十分にある。Volkによるとマーニリーウスの主要な思想的背景にはストア派の語源論を認めることができるとされるが (Volk 2009: 231, 234)、詩の理解や創作という点でもこの詩人がストア派の思想と関連を持っている可能性はある。特に序歌に現れた象徴的・両義的表現とストア派のアレゴリーについては SCHRIJVERS 1983: 149, またストア派の詩論との関わりについては竹下

## 文献一覧

- [1] BECHERT, M.(1900), in POSTGATE, I.P.(ed.), *Corpus poetarum Latinorum*, II 3, Londini.
- [2] BENTLEY, R.(1739), *M. Manilii Astronomicon*, Londini.
- [3] BREITER, T.(1907-1908), *M. Manilius: Astronomica*, I. Text, II. Kommentar, Leipzig.
- [4] DE VAAN, M.(2008), *Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages*, Leiden.
- [5] FAYUS, M.(1679), *M. Manilii Astronomicon*, Parisiis.
- [6] FELS, W.(1990), *Manilius: Astronomica*, Stuttgart.
- [7] FERABOLI, S., FLORES, E., SCARCIA, R.(1996), *Manilio: Il poema degli astri*, vol. 1., Milano.
- [8] ———(2001), *Manilio: Il poema degli astri*, vol. 2., Milano.
- [9] GOOLD, G.P.(1977), *Manilius, Astronomica*, Cambridge/Mass.-London.
- [10] ———(1985, ed. corr. 1998), *M. Manilii Astronomica*, Leipzig.
- [11] HOUSMAN, A.E.(1903), *M. Manilii Astronomicon liber I*, Londinii.
- [12] ———(1930), *M. Manilii Astronomicon liber V*, Londinii.
- [13] HÜBNER, W.(2010), *Manilius: Astronomica Buch V*, Bd. 1 Einführung, Text und Übersetzung; Bd. 2 Kommentar, Berlin/New York.
- [14] JACOB, F.(1846), *M. Manilii Astronomicon libri quinque*, Berolini.
- [15] JONES, F.(1984), 'A Note on Manilius 5. 604', *Acta Classica* 27: 139.
- [16] LIUZZI, D.(1991), *Astronomica libro I*, Galatina.
- [17] ———(1997), *Astronomica libro V*, Galatina.
- [18] LÜHR, F.-F.(1969), *Ratio und Fatum: Dichtung und Lehre bei Manilius*, Frankfurt am Main.
- [19] MALTBY, R.(1991), *A Lexicon of Ancient Latin Etymologies*, Leeds.
- [20] PINGRÉ, A.G.(1786), *Marci Manilii Astronomicon libri quinque cum interpretatione Gallica et notis*, 2 voll., Parisiis.
- [21] SCALIGER, J.(1579<sup>1</sup>), *M. Manili Astronomicon libri quinque*, Lutetiae.
- [22] SCHRIJVERS, P.(1983), 'Le Chant du monde : Remerques sur *Astronomica* I 1-24 de Manilius', *Mnemosyne* 36: 143-150.
- [23] VAN WAGENINGEN, J.(1921), *Commentarius in M. Manilii Astronomica*, Amsterdam.
- [24] VOLK, K.(2009), *Manilius and His Intellectual Background*, Oxford University Press.
- [25] WORMELL, D.E.W.(1960), 'Lucretius: The Personality of the Poet', *Greece & Rome* 7.1: 54-65.
- [26] 竹下哲文 (2016), 「マーニールウス『アストロノミカ』第1巻序歌の研究」『西洋古典論集』24: 21-46.

---

2016: 32-38 を参照.